



読者の声

*電子メールによる「読者の声」への投稿は、
jjscomment@jsa.gr.jpまでお寄せください。

●大阪の街中サイエンスカフェに参加して ～市民は知ること・学ぶことを欲している～

1月22日、人工知能研究会の大学院生を話題提供者に迎え、大阪北天満で開催されたサイエンスカフェのテーマは、「社会に浸透するAI 何ができる 何が出来ないのか？」。最近テレビ等で頻繁に出てくるAI (Artificial Intelligence, 人工知能) のことを知りたくて集った参加者は、AIについて素人の市民です。参加者は疑問に思っていることをどんどん質問する。「AIは深層学習で何をどのように学んでいるのか?」「人間の思考方法とAIの違いは?」「車の自動運転はどのように道を認識しているのか?」等々。AI社会に向けた倫理規程が必要ではないかとの指摘もあった。最先端技術AIに真正面から向き合う市民の熱意を感じた。

市民は科学的知識を知ること・学ぶことを欲している。そんな市民の要望に応えることは、JSAの大切な活動であるとの思いを強くした。『日本の科学者』にも、その役割を担うことを期待したい。
(大阪支部 小笠原京子)



●2月号山田論文「靈長類における平等と利他性の起源について」を読んで

心は遺伝子の働きですが、遺伝子は環境と密接にかかわっています。遺伝子（心）は環境の影響を受動的に受けただけでなく、環境に能動的に働きかける逞しさを発揮します。それが心の輝きだと思います。ヒトは存在するだけでなく、創り出されて行くところが素晴らしいところです。

ろです。

また、「平等」については、遺伝子的には二人と同じ「私」は存在しないといわれ、決して平等ではありません。

山田論文はホップスとルソーの二人の思想に沿って論述した後、「おわりに」の項において、「どのような条件であれば人間社会がより利他的で、より平和な状態が生じやすくなるのかを現実的に模索するしかないだろう」と結論付けているところを興味深く感じました。

(静岡支部 河合聰)

●博多駅前道路陥没は実験だった

福岡市営地下鉄七隈線延伸工事について、「日経コンストラクション」の2016年11月8日号には、大成建設が開発したトンネル先行変位計測システム『TN-Monitor』は、今回の工事に初適用とあります。いわば実験だったのです。発注元の福岡市は工学の知識はありません。言葉巧みに説明を受け、そのまま信じた結果がこうなりました。このようなことを防ぐには福岡市など地方自治体が工学の知識をしっかりと職員を採用すること、土木学会ではこのシステムへの厳しい批判、評価が下されることが大切です。

笹子トンネル（1976年）の天井板を設計したのはパシフィックコンサルタントで施工したのは大成建設でした。天井板を吊るすアンカーにケミカル・アンカーが初めて採用されました。アンカーはもともと埋め込みで、逆八の字型でコンクリート・アンカーが常識でした。ところが大成建設が提案したケミカル・アンカーを旧道路公団が信用してしまったわけです。

本番の工事で実験するというのは、どうなのでしょうか。
(大阪支部 西山豊)

特集

「日本は法治国家」か？ —辺野古・高江から地方自治と国家を問う

特集
まえがき

前田定孝

2016年12月20日、最高裁第二小法廷は、国が翁長知事を相手取って提起していた地方自治法上の不作為の違法確認訴訟を認容する判決を出した。辺野古新基地建設に際して翁長雄志知事によってなされた公有水面埋立承認取消処分の取消しに対して、国土交通大臣が知事に是正の指示をしたもの、知事が従わなかつたとして、国が提起した訴訟である。国による地方自治権侵害については判断を回避しつつ、原審・福岡高裁那覇支部判決を踏襲し、沖縄県の訴えを全面否定したのである。

思えば2016年の沖縄における一連のできごとは、戦後日本の地方自治や法治主義をめぐり、さらに基本的人権および将来にわたつて保全すべき自然環境をめぐり、歴史上まれに見る大きな問題が提起するものであった。それは、戦後70年以上にわたって、われわれの先人とわれわれ自身がつくりあげてきた、〈国家と国民との関係性のあり方〉そのものを否定するものもある。

佐藤学「日米軍事同盟体制と沖縄の役割」は、アメリカの世界戦略に照らして、沖縄の海兵隊が何のために存在しているのか、その主力輸送機となるオスプレイとはいかなる飛行機なのか、日本政府がお守りのように取り扱う辺野古新基地やオスプレイは、日本国民にとって何を意味するのかを検証する。

徳田博人「辺野古裁判の検証と今後の展望と課題」は、辺野古新基地建設をめぐる不作為の違法確認訴訟の高裁および最高裁判決を検証するなかで、「国が自ら地方自治制度を

使って、地方自治や法治主義を破壊する訴訟」とその性格を規定しつつ、今後予想される翁長知事による公有水面埋立承認撤回等の理由づけについて展望する。

続いて亀山統一「沖縄島の自然環境保全の課題」は、国立公園に指定されたやんばる地域の自然環境としての意義およびそこに設置された米軍基地の否定的影響を述べたうえで、陸域、マングローブ、浅海域が一体となった生態系を守ることの意義を述べる。

宮城秋乃「やんばるの動物と生物多様性」は、東村高江等で強行された米軍ヘリパッド建設や飛行訓練がやんばるの希少生物たちの生命や住処を奪っていることを、写真を交えながら告発する。

亀山・宮城の両論文は、「法」の前提である人と自然との関係から問い合わせるものである。

前田定孝「高江一暴走する国家権力」は、7月22日以降高江地域において強行されたヘリパッド工事のなかで、沖縄防衛局や警察によって行われた、反対住民等に対するテントの強制撤去や検問、情報収集活動について、あらためて「法治主義」の視点から検証する。

このような検討を通じて、本特集では、日米軍事同盟体制のもとで、とくに沖縄周辺で進展するアメリカ軍の再編のなかで、辺野古・高江において民意を無視して強行された米軍基地・訓練施設建設等の実態を検証する。そのことを通じて、本来国家というものと国民との関係性はいかにあるべきかを考える。

(まえだ・さだたか：三重大学、行政法)